

【文芸時評】
文学の根幹

横尾和博

NHK教育テレビで「吉本隆明語る「沈黙から芸術まで」を見た。二〇〇八年夏に二千人の観客の前で三時間に渡って、自らの芸術、文学、思想について熱く語ったものを一時間半の番組に縮小して放送されたものである。糸井重里が協力して行われたこの講演会、チケットは一晚で完売だそうである。八十四歳になった吉本さんは、私たちが若いころ聞いた講演となんの遜色もなく、むしろその思想は深まって、いかにわかりやすく伝えるかに心を砕いていた。十五年前に「全共闘白書」を出版した人たちと、東京の本駒込の吉本さん宅におじゃましたときと変わらない生活も紹介され、懐かし思いにかられた。

吉本さんの言語芸術論の基本は、言語の機能は「自己表出」と「指示表出」に分かれる、芸術に価値があるとするとするなら「自己表出」こそが、樹木でいえば根であり幹である、ということだ。私たちが日ごろ言語を伝達手段として活用している「指示表出」はむしろ枝葉なのである。簡単に文学の場で要約すると、新鮮な驚き、感動、「言葉にならない言葉」、むしろ沈黙に限りなく近い言葉が「自己表出」であり、それを他者に伝えようとする言葉が「指示表出」である。

私たちは小説を読みながら、作者が描く精神や心の動きのなかに自己表出を見て、そのことに感動する。ストーリーやテーマに感動するのは「指示表出」の分野であり、その価値観は人それぞれであり、判断の基準がない。指示表出の分野での判断基準は、私がいづも書く「リズム」、「場面転換」、「場面凝縮」、「比喩」ということになり、これも吉本さんの主張である。

芸術の価値とは、言葉にならない言葉、沈黙に近いところの言葉をいかに紡ぎ出すか、ということにかかってくる。作品全体が、作品の一部にそのような表現があることが、大切である。

以上は十代後半から「吉本かぶれ」だった私が、いまでも文学に接するときの基本の考え方である。

さて現在の文学上の話題はなんといっても四月に発売された、村上春樹の『1Q84』BOOK3である。昨年の二冊に続いてベストセラーになることは間違いないが、なぜ村上春樹が読まれるのか、本質的な議論をあまり目にしない。村上春樹は、自分の置かれた時代と場所（時間と空間）のなかで、世界と自分を繋ぐ回路を真摯に考えている作家である。一九七九年の群像新人賞受賞の際は悪評も多く、いまだに「文壇」からは無視され続けているが、現在の文学情況が閉塞感溢れ、ひとり世界と立ち向かおうとする勇気のない物書きが多いなかで、読者に問題を提起し、読者とともに思考を続ける稀有な作家である。

かつてラスコーリニコフは、大学を中退しペテルブルグの間借りの下宿屋で極貧生活をおくるなかで、賄い女が「毎日ぶらぶらして仕事はしないのか」と問うたのに対し、彼は「考えることをしている」と答えた。考えることを、言葉にしたのが村上春樹だ。

また前号では間に合わなかったが、立松和平が二月八日、六十二歳で亡くなったことに触れたい。行動派の作家として、世界中を放浪し、その本は三百冊以上に及ぶ。彼の放浪

は求道僧のようでもあった。私との共著『ドロップアウト』のあとがきで彼はこう書いている。

「長いのか短いのかわからない人生である。一人の人間には一度の人生しかないのだし、それはいろいろなことがあるだろう。そのいろいろなことに、人はさらされ、破滅の危機さえ迎え、また磨かれる。人が生きるということにとって、すべての時が、すべての場所が、道場なのである。この道場があるからこそ、人は生きていけるのだ」。

いつも彼に会うと、「横尾さん、ご飯たべられている？」と私の文筆生活を気にかけてくれていた。最後にあったのは昨年夏、日本ペンクラブ平和委員会の会合と二次会の席、そのときも彼はそう言っていた。それが最後の別れとなった。人生は道場である、彼の言葉を噛みしめる毎日である。

さていつものように同人誌について私見を述べる。本稿は四月末に筆を執っているのですが、その時点で編集部から私に届いたものが対象となっている。発行時期と批評時期の遅れは、ご寛恕いただきたい。

「九州文学」9号富崎喜代美「櫻の忌」は、失恋のために鉄道自殺をはかった小学校の女性教師が主人公。彼女は用務員の男に助けられ、足が不自由になったのをきっかけに捨て鉢な気持ちとなり、その用務員の男と同棲するようになる。男は年齢が一回り以上も上で、背中がまがり特異な容貌からみなに嫌われていたが、以前から女性教師をストーリーカーのように狙っていた。事件によって彼女をようやく自分のものにするこゝとができたのだが、結末には不幸が待っている。この作者の作品は以前の「石をうむ」（同誌6号）と今回の二作しか読んでいないが、多くの可能性を秘めている。その可能性は作品のなかに言葉では表現できない濃密な何かが存在し、言葉にならぬ身体感覚をぎりぎりの境界点で表現しようとしている。ストーリー自体は作りものとの感があるし、今回の作品ももつと削ったほうがよいとも思うが、人間の愛憎や哀しみ、怒りや諦念、肉欲と愛を深く掘り下げ、登場人物に作者の甘い視点がないのがよい。ドストエフスキーの小説「おとなしい女」（クロトカヤ）のようにも読める。今後期待できる書き手だ。また同誌はいつも多くの小説を含め充実した誌面づくりで感心している。

「季刊遠近」39号、藤野秀樹「あれの荒野の果てに旅する者」は、主人公は千葉市内でタトゥースタジオを経営する五十六歳の男、そこに大天使サリエルと名乗る若い女性が訪ねてきてドタバタが繰り返される。アクション映画を見ているように状況が頭のなかに浮かんでくる。私の好きな北野武の映像を思いだす。映画の脚本にもよいかもしれない。難波田節子「郭公の雛」は、夫が病気で死亡してから半年後に生まれた女の子を義兄の養女として渡した主人公の二十年後の回顧譚。赤子の父親はその義兄だったという話で、ストーリーはまとまっているが、人間の内面性の奥底、暗い部分をもつと描きだしてほしい気もした。

「郡山文学」35号では、菅忠「お前はどこの仔」、定年退職後妻に離婚された男の独り暮らしを描く。話はうまく共感も覚えるが、主人公の内面をもつと描く必要があると思うがいかがであろうか。

「北斗」1・2月号、3月号、4月号では3月号の大西亮「あの夜の真実」が心に残った。三十年前、修学旅行の宿で、三人の男性教師が女性教師をレイプしたのを目撃した主

人公が、亡くなった女性教師の無念をはらす話。その後主人公の追求に三人の男性教師や校長の韜晦がよく描かれ、内面のあり方を興味深く読んだ。

「四人」85号、成清良孝「老いらくの性」は、高名な歌人の老年期の性と女性主人公の不倫のふたつのテーマをからませている。話の繋ぎ方、接続が不自然のような気がしたのと女性主人公の人間性をさらに深く描いてほしいと思った。

「二十一せいき」は14号と15号、相加八重「こちらは『愛真社』です」は、夫婦でペットの葬儀屋を経営する男の日常をコミカルに描いた佳作。男はある日愛犬の葬儀を頼まれたのだがうまくことが運ばない。死や老いという重い課題を、お人好しで計算高く世渡りできない男の人間性に仮託して、さりげなく人生の哀感を私たちに提示してみせる。その手口が鮮やか。古岡孝信「大安吉日」は、田舎にいる独り暮らしの母親を喜ばせようと都会に出ている四十男が、偽装結婚する話でこちらもおもしろい。

「詩と眞實」では、727号の木下恵美子「死の島」が傑出している。都会に出て結婚後十年経った女性が主人公。夫には愛人がいて子どもまでできている。失意の果てに家を出て郷里近くの町でアパートを借り、スーパーに勤める。アパートの隣は使われていない古い刑務所。やがて近所の骨董屋の主人と知り合い心が通いはじめるが、町の再開発でその骨董屋とも別れがやってくるのだった。身体感覚が鋭く、孤独や喪失感がよく表現されている。死の島、との題名が比喩するのは、刑務所と自分の住むアパートの一角をさす。作者の深い情念を封印し、言葉にならない言葉を綴っている。作者にとつて、「ほんとうの自分」を表現しきれないもどかしさが残るかもしれないが、秀作である。同誌729号の園村昌広「神隠しの夏」濁流」は、717号に掲載された作品の続きでこの先が期待される。大作の予感。また正田吉男も730号で連載「放牛往還記 白毫」でがんばっていて楽しみ。

「文学街」270号、271号、272号では271号の荒井登喜子「死の淵」が秀逸である。妻は若年性の認知症を患い、次男は五年前胃ガンで死亡。長男は東尋坊の断崖から飛び降りたらしい、との知らせを受け取った老年の男の孤独を描く。生に疲れ果てた男の声なき声が行間に溢れている。272号の間宮武「娘の部屋」はある家族の歴史を父親の視点で娘との関わりで描いた。その真摯な筆使いに好感を持った。270号の掌篇、原石寛「我が老残人生」は卒寿を迎えようとする作者の日常を描いて目を惹いた。何げない毎日を描くことができるのは、作家のみに与えられた特権である。一般人には日常は描くことができないのだから。今後もこの日常に執着して筆を執ってほしい。すぐれた先達には、永井荷風がいる。

「岩しよう★」18号、馬場駿「やさし鼠姫」、主人公の男はホテルの従業員。同じホテルで働く十八歳の少女が半年前に自殺した。同僚の男の子どもを身籠もっていたのだ。その少女との交歓を描いた回顧譚。男の少女への視線の背後には自分の家族の話がある。もっと読んでみたいような余韻が残る作品。

「仙台文学」75号では佐佐木邦子「氾濫」が目立った。明治四十三年北上河の洪水や貧しい農村の姿を背景にタカという女性の生き方を描き、その力強さに心が打たれた。

「内海文学」129号石倉智巳「惺々著」、四十代で妻と死別、六十歳になる前に学者の仕事を辞め悠々自適でホームパーティを開き、女性と奔放に付き合っているが父親の遺品の掛け物にある言葉から自己に目覚めるとの話。老年のお伽噺のようにも思えるが、説明

文が多すぎるので描写文を多用してはいかががかと思う。

「米子文学」57号野坂喜美「はんにやしんぎよう」は、猪狩りの猟師の話で民話（フォークロア）の要素が強く読ませる。佐藤多美子「力りきさんの恋」は、墓参に帰った女性が若いころに過ごした村を通りかかり、その昔を回顧し、戦後村に蔓延していたヒロポンで中毒に罹っていた男のことを思い出す話。この作品、読者を惹きつけ読ませる魅力がある。

「じゅん文学」63号では、光郷輝紀「赤い月」、長谷譲「性獣」の二篇。光郷作品は二十歳代後半の主人公の男が、五歳のときに家を出ていった母を大地震発生を契機に尋ねる話。母は住んでいる村で「女帝」のように振る舞っていた。村上龍の作品のような幻想的な話で興味深い。長谷作品は、やはり男性が主人公で中学生のときに同性愛者のプール監視員に犯され、事件の傷でいじめに会い引き籠もりになる。その犯した男と再会したことで主人公の人生が狂っていく。この作品を読んでいると中上健次を思いおこす。中上のように生のダイナミズムと狂おしい性をさらに描ききってほしい。

「山形文学」98集は小説三作。しん・りゅう「狂詩曲・石の宴」、高橋菊子「わたしの羽衣で翔んで行った男」、笹沢信「梶子」。三作に共通するのは描かれている世界に静謐なイメージがあり、それが魅力となっている。

「たまゆら」78号の武田民子「青いダリア」は、母子家庭に育った兄弟の兄が、母の死をきっかけに、父の消息を尋ねる話で、二十枚のなかに見事に額縁の絵のように収まっているのが魅力。

創刊された「サロン・ド・マロリーナ」はインターネットで知りあった創作仲間が発表の場として作られた雑誌。和泉あかね「花葬の影」、中村鷹一郎「空襲警報」の二作をおもしろく読んだ。和泉の作品は葬儀という素材選びに注目。中村の作品は舞台を見ているような、ひっくり返し方が見事。可能性のある雑誌なので今後に期待したい。まずは三号雑誌に終わることなく、持続させることが大切である。

創刊といえ白石すみほがPLASONEを加えて昨年三月から作品集「ふたり」を生み出した。3号の短編「付喪神」は、ロボットと暮らす老女の話。老い、孤独、コミュニケーションとテーマが明確。『全作家短編小説集』に収められた作品の再掲載だが、その視点と筆の確かさに感動を覚えた。

最後に「全作家」77号の掌篇特集 作品のなかから気になった作品名を挙げると小野村誠「感動」、小笠原幹夫「龍灯祭」、豊田一郎「連れ合い」、マックあつこ「ダーリンズ」、古倉節子「くまいちゆたあ」、美倉健治「金縛り」の各作品である。理由はそれぞれにあるが、字数に限りある本欄では述べるできないので、合評会などを待ちたい。

そのほか気になった誌を挙げておく。「樹海」18号、「なんじゃもんじゃ」9号、「境」22号、「南翠文館通信」一〇一〇年冬季号、「春風」23号、「水戸評論」122号、「習志野ペン」88号、「未来山脈」247号、「柵」277、278、279号、「労働者文学」66号、「たまゆら」77号、「河」153号、154号、「原石寛自選作品集」などである。

ベスト5は以下のとおり。富崎喜代美「櫻の忌」、木下恵美子「死の島」、荒井登喜子「死の淵」、相加八重「こちらは『愛真社』です」、藤野秀樹「荒野あれのの果てに旅する者」を挙げたい。いずれも全作家賞に応募すればかなり高い点数がつく作品だと確信している。今後

期待したい。

言葉で表現する芸術作品は、作品の背後に潜む闇をいかに読者に見せることができるのか、それが問われる。書いてあることだけで表現が完結し読者が「納得」してしまう作品は、未熟というのかもしれない。毎月多くの同人雑誌に触れ、心が震えるような作品に出合ったとき、私もまだ途上にあることを思いしらされる。先日、田口ランディとテレビで一緒の際、彼女は「広く浅く伝えることより、一人が深い思いを伝えることのほうが大切」と言っていた。

言葉の闇は深い。

筆者プロフィール..

文芸評論家、放送作家、NHK学園自分史講座講師。現在時事通信、北海道新聞、東京新聞で書評を担当。テレビでは愛川欽也、武田鉄矢、中西哲生、香坂みゆきなどのレギュラー番組の企画・構成、台本作を担当。人気番組「愛川欽也バックインジャーナル」ではコメンテーターとしてもレギュラー出演中。ラジオでは東京FM「クロノス」で、文学や読書に関するトークを展開中。著書「村上春樹とドストエーフスキイ」「新宿小説論」ほか、共著「立松和平 ドロップアウト」「立松和平 文学の修羅として」ほか。